

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	シャルル=ルイ・フィリップ「クロキニョル」における自殺について
Author(s)	東海, 麻衣子
Citation	フランス文学, 26 : 49 - 60
Issue Date	2007-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041083
Right	
Relation	



シャルル＝ルイ・フィリップ『クロキニョル』 における自殺について

東海 麻衣子

はじめに

今日、シャルル＝ルイ・フィリップ（1874～1909）の評価は決して高いものとは言えない。ヴァン・ティーゲムによるフランス文学辞典を見てみると、フィリップのために割かれた説明はわずか25行にすぎず、生涯の友であったアンドレ・ジッドの3ページ強とは比較にならないほどの分量である¹⁾。また白水社の『フランス文学史』でも、あっさりとした1行でその説明を終わらせている。いずれにおいても、フィリップは「ポピュリズムの先駆者の一人」とのみ紹介され、文学史の片隅に追いやられているのが現状だ。

しかしながら、20世紀初頭、代表作『ビュビュ・ド・モンパルナス』によって名声を得たフィリップは、*La Nouvelle Revue Française*の創設メンバーの一人に名を連ねるなど、フランス文壇の中心に位置していた。そして35歳で病死すると、*N.R.F.*から「フィリップ追悼号」が出され、編纂者であるジッドのほか、ポール・クローデルをはじめとする16人もの文学者が、フィリップのために文章を寄せた²⁾。こうしたことから、フィリップが生前いかに注目されていたか、またその作品がいかに評価されていたかがうかがえる。そしてまた、日本においても、1930年、1952年といずれも3巻におよぶ全集が出され、多くの読者を得てきた。堀口大学や三好達治らに訳されてきただけでなく、太宰治や中島敦といった錚々たる作家たちに愛読され、言及されてきたことは特筆に値しよう。

フィリップは、35年というその短い生涯のうちに、完成度の高い10数編の作品を残した。市井の人々が織り成す物語を通して、愛や孤独、生と死といったテーマを描いたが、中でも多くの紙幅を割いたのが、本稿で取り上げる「自殺」というテーマである。我々はこのテーマのうちに、フィリップ独自の世界観を見出す。では、フィリップの描いた自殺とはどのようなものだったのだろうか。そして彼はそれによって何を伝えようとしたのだろうか。

1897年に出版された自殺研究の名著、エミール・デュルケムの『自殺論』をひもといてみると、1850年あたりからヨーロッパ全体において自殺が増加していること

が見て取れる³⁾。これに伴い、自殺に関する書物も数多く出版された。デュルケムの『自殺論』に先立つブルダンの『病として考察される自殺』(1845)やタルドの『模倣の法則』(1890)といったさまざまな研究書のほか、1851年に出版されたショーペンハウエルの哲学的随筆「自殺について」が物議をかもしすなど、自殺というテーマは広く議論されるようになっていた。また、自殺を扱った19世紀の小説として真っ先に思い浮かべられるフロベールの『ボヴァリー夫人』は、1857年に出版されている。

こうした流れの中、フィリップも中編「ロジェ・ジャンの日記」(1896)を皮切りに、長編『ペルドリ爺さん』(1903)、時評「ある自殺について」(1906)、長編『クロキニョル』(1906)、短編「自殺未遂」(1908)といった作品において、自殺を描いていく⁴⁾。つまりフィリップは、作品を発表し始めた22歳から、死を間近にした34歳までの一生涯、このテーマを世に問い続けたことになる。しかも、青年、老人、若い娘、とその主体もさまざま、彼にとってこのテーマがいかに重要なものであったかが分かるのである。

本稿では、これらの作品の中から、晩年の作『クロキニョル』を取り上げたい。というのも、二人の登場人物の自殺を描いた『クロキニョル』は、フィリップが真っ向から自殺というテーマに取り組んだ長編小説であり、独自の自殺観を最も色濃く映し出した作品であると思われるからだ。我々は『クロキニョル』の作品分析を通して、フィリップの抱いていた自殺観を明らかにし、その独自性について考察をめぐらせたい。

作品のアウトライン

『クロキニョル』は、ゴンクール賞こそ僅差で逃したものの、文壇から非常に高い評価を受けたフィリップ晩年の野心作である。まず、そのあらすじから見ていこう。

舞台はパリの役所。そこには、「お役所」を具現化したようなポーラ、陽気で快樂主義者のクロキニョル、真面目で誰からも尊敬されているフェリシアン、物静かで内気なクロードという4人の登場人物が働いている。

第2章では、場面は役所からパリの屋根裏部屋へと移る。そこには、痩せた小さなお針子のアンジェールが住んでいて、朝から晩までミシンを踏んでいる。単調な生活を送るアンジェールだが、ある日彼女は、隣に住む女、すばらしい肉体をもち、奔放に生きているマダム・フェルナンドに出会い、外の世界を知っていく。

第3章。舞台は再び役所に戻る。お調子者のクロキニョルが遺産を相続し、裕福になった彼は、仲間の3人を豪華な食事に招待する。招待を断ったポーラを除き、

クロキニョル、フェリシアン、クロードの3人は、郊外へと繰り出す。天気の良い日曜日、田園の中のレストランで彼らはたらふく食べ、心地よく酔い、すっかり上機嫌でパリに戻ってくる。そして彼らは、第2章で紹介されたアンジェールとマダム・フェルナンドという二人の女と知り合う。

第2部に入ると、まずクロキニョルとマダム・フェルナンドの関係が描かれる。マダム・フェルナンドの肉体を所有し、世界を征服したかのような得意の絶頂にいるクロキニョルと、自らの身体を磨きあげ、飾り立てることしか頭のないマダム・フェルナンド。クロキニョルはマダム・フェルナンドを金で満たし、彼女に衣類や宝石を買い与えることに夢中になる。

第2部第2章では、クロードとアンジェールの物語が進行していく。内気な二人は少しずつ親しくなり、クロードは、アンジェールの部屋に毎日通うようになる。しかし二人に肉体関係はなく、クロードはアンジェールとの結婚を夢見ながらも、ただ話をし、家事を手伝い、彼女を散歩に連れ出すだけで満足している。クロードはアンジェールが今までの単調な生活にあきたらなくなってきたことに気付いていない。

そして第3章で悲劇が起きる。クロキニョルが、アンジェールをも征服してしまうのだ。アンジェールは、クロキニョルに押し倒され、彼を受け入れてしまう。翌日、後悔したクロキニョルは、友であるクロードにそのことを告げ、謝るのだが、クロードは絶望し、アンジェールに別れの手紙を書く。そして事の重大さにショックを受け、虚脱感に襲われたアンジェールは、淡々と用事を済ませ、ひっそりと自殺してしまう。

こうして、アンジェールは死に、小説は結びの章に入る。アンジェールの葬儀一切の費用をもち、葬式を済ませたクロキニョルは役所を去る。そして2年後、突然役所に現れると、仲間に相変わらずの陽気な姿を見せ、自らの優雅な生活を語る。

しかし翌日、クロキニョルから手紙を受け取ったフェリシアンは、その日の夕刊で、クロキニョルがピストル自殺によって、命を絶ったことを知るのである。

内と外

この小説は、「内と外」というはっきりとしたコントラストに彩られている。

物語は、役所にある半円形の小窓の描写から始まるのだが、その「額の幅ほどしか開かない」(p.4)小窓を境に、内と外はそれぞれ別の空気、別の陽射し、別の時間を有している。

内、すなわち役所には「乱してはならない別の空気」が存在していて、それは、外の「広い、のびやかな、嬉々とした、強い酒にも似た」(p.4)空気とは対照的で

ある。そして、役所に射すのは、「アーチ型の窓枠どおりに仕切られた陽射し、自由を奪われた、縛られた陽射し、悩める陽射し」(pp.5-6)であって、出勤時の街に漂っているような「8時半の純潔な、洗われた陽射し、空が夜の間には大地の上に用意しておいた陽射し」(p.7)とはまったく異なるのである。

時間に関しても、役所には役所の時間が流れている。この擬人化された役所の「時間」(p.46)は、「朝になると、身を引かずするようにして、ぶつぶつ言いながら、よろよろとやって来て、薄暗い暗闇を探す」。そして、「生きてはいるらしいのだが、夕方まで動きもしない」(p.255)。ここにあるのは、どのようにして1日が過ぎたか分からないような、郊外での楽しい時間と同じ「時間」ではない。役所には、「どう抵抗してもはじまらないような永遠の時間」(p.48)が居座っているのである。

この内と外の対比のうちに、登場人物たちが配される。

まず、役所で働く4人の仲間を順に見てみよう。最初に登場するのは、「お役所そっくり」(p.21)と評されるポーラである。物語をとおして、彼が役所から外に出ることはない。クロキニョルの誘いにも心動かさず、女や酒や美食の存在する外の世界とは隔絶している。つまり、ポーラは「お役所」≪ Administration ≫ そのものなのである。

次に登場するのは、題名にもなっている「クロキニョル」である。アリステュード・ビュフィエールという本名をもつ彼は、毎朝売春宿に立ち寄り、娼婦たちに「クロキニョル」という乾菓子を配って歩いていることから、こう呼ばれるようになった。クロキニョルは、女好きで、おしゃべりで、陽気な男である。

3番目に登場するのは、蒼白い顔をして、杖をついている、賢者のようなフェリシアンである。母と妻と3人の子供を養いながら、慎ましく暮らす彼は、その真面目で善良な性格から、皆に愛され、尊敬を集めている。

そして、「4番目の仲間」(p.50)として最後に紹介されるのは、クロードである。無口で孤独な性質のクロードは、「額に汗して汝のパンを得よ」(p.53)という箴言を固く信じている生真面目な青年である。

以上の4人が主要登場人物として紹介されるわけだが、ポーラ、フェリシアン、クロードという3人と、主人公であるクロキニョルはそれぞれ対比関係にある。では、ポーラとクロキニョルの対比関係から見てみよう。彼らの対比は以下のような挿話に現れている。

窓から女たちを眺めるクロキニョルは、ポーラに「君も女たちを見てみる」とすすめるのだが、ポーラは「そんな気にならない」(p.26)と答える。これに呆れた

クロキニョルは、次のように嘆く。

— Il [=Paulat] n'a même pas d'imagination. Bon Dieu ! dans quelle boîte suis-je donc tombé ? (p.27)

ポーラは内でしか生きられない人間として描かれている。「お役所」を象徴するポーラと、その「お役所」を窮屈に感じるクロキニョル。人間味の全くないポーラと、人間味にあふれたクロキニョル。ここに示されているのは、四角四面の役所と、生き生きした外の世界とを最も象徴的に対比させた構図である。

次に、フェリシアンとクロキニョルの対比を見てみよう。「自分の身に背負いきれぬことを人生から取らぬようにせよ。」(p.39) という主義をもつフェリシアンと、あらゆる快楽に貪欲で、「無限を渴望している男」(p.147) と自負するクロキニョル。中庸の美德を示すフェリシアンと、すべてにおいて過剰であるクロキニョルとの対比は、前述した小窓をめぐる挿話に現れる。

開かない窓に憤慨し、「そのうちにきっとぶち抜いてやる。」(p.24) と拳を振り上げるクロキニョルを横目に、フェリシアンは、窓の一部を取り外すことを思いつく。この取り外した窓は、夕方また嵌め直せば良いのだ。こうしてフェリシアンは、役所にいながらにして、「澄んだ、部屋の空気とは全く違った空気」(p.24) を得ることに成功する。そして「壊すより、もっといい方法があるもんですよ。」と言うフェリシアンに対し、クロキニョルは「わかってるよ、あなたは頭で考える人間だ。だが私は、身体の中に肉をもってるんだ。こいつをどうしてくれるのです。まさかこれでものを考えるわけにはいかないでしょう。」(p.25) と答える。

内と外を隔てていた小窓を取り外すことで、フェリシアンは折り合いをつけた。理性で行動し、中庸を徳とする。そんなフェリシアンは「ジユスト・バランス」*« la Juste Balance »* (p.33) というあだ名で呼ばれている。彼は内と外とを「ちょうどよいバランス」で分かち合うことのできる人間であり、クロキニョルが唯一尊敬している人物でもある。これに対し、情熱に突き動かされるクロキニョルは、外の空気を得るには、小窓を壊すか、外に出るか、いずれかしかないと考える。こうした過剰さが、クロキニョルをやがて自殺へと導いていくことになるのである。

では、クロードとクロキニョルの対比に移ろう。

アンジェールをはさんで、奪われる者と奪う者という関係を成す二人は、それぞれ貧困と富裕を表象している。貧しい労働者階級出身のクロードと、医者の子で

あり、今や金利生活者となったクロキニョル。「額に汗して汝のパンを得よ」という教えのもと、貧しい家庭に育ったクロードにとって、働かずして生きるということは、「ありえないこと」(p.53)である。彼は、次のように描写される役所の職員すべての代表者なのだ。

On appelle l'endroit où vous êtes un bureau ! Il y eut une époque pendant laquelle vous pensiez au bien-être, aux jours calmes et où vous étiez heureux d'être assis et d'avoir le pain assuré. Vous vous réjouissiez d'avoir conquis ces choses. Ne sentez-vous pas maintenant combien vous gagnez péniblement votre pain quotidien ? (p.49)

しかし、彼らはどんなにつらかろうとも、働かなければならない。外に出て行くことができるのは、クロキニョルのような金持ちだけであり、クロードのような貧乏人に内を拒むことはできない。クロードとクロードが代表する同僚たちは内に残るよりほかないのである。

このように、内でしか生きられないポーラ、内と外を巧みに行き来しながらも、内に残るフェリシアン、そして内で生きることを余儀なくされているクロードという3人と、外へ出て行く主人公クロキニョルとの対比関係が示されている。そしてこの内と外の対比はまた、二人の女、アンジェールとマダム・フェルナンドにおいても見られるのである。

屋根裏部屋にこもり、シャツに囲まれて暮らしているアンジェールと、男に金を出させ、街を闊歩するマダム・フェルナンド。対極にある二人がある日出会う。そして、これまで屋根裏部屋という内の世界しか知らなかったアンジェールは、マダム・フェルナンドによって男達のいる街へと連れ出される。それによって、アンジェールは外の世界を知っていくのである。

以上、『クロキニョル』における対比関係を見てきた。

役所と外、屋根裏部屋と街という舞台設定。「お役所」、「中庸」、「貧困」をそれぞれ表象する役所の同僚たちと、その対極に位置する主人公。内と外を表象する正反対の二人の女。

こうした背景において、自殺というテーマが追求されていく。では、ここで描かれていく自殺とは、一体どのようなものなのだろうか。

アンジェールの自殺から見ていきたい。

アンジェールの自殺

アンジェールの自殺は、クロードの「もう会わない」(p.236)という手紙が引き金となって起こる。けれども、アンジェールはクロードを愛していたわけではない。ではなぜ、アンジェールは自殺しなければならなかったのだろうか。以下はアンジェールが自殺する直前の描写である。

Il lui [= à Angèle] semblait qu'un poids énorme la gardait assise, que, par delà la fatigue de sa nuit blanche, il y avait la fatigue de bien des jours de couture, et que la solitude, les pensées, les chagrins, tout cela comme un fardeau était tombé sur elle, et que, plus profondément encore, par couches successives, des fatigues inconnues, des fatigues mystérieuses la pénétraient dans sa chair ; (p.241)

こうしてアンジェールは練炭に火をつけ、横になる。そして、「最後のときには、絶対になにひとつ後悔しないように、ローズさんのことを考えればいい」(p.244)と思う。ローズさんとは、アンジェールと同じ工場で働く55歳のお針子で、独身の老嬢である。ローズさんの生活は、一日中シャツを縫い、8時に帰宅し、9時にスープを食べて寝るという毎日の繰り返しだ。アンジェールはローズさんのようになることを恐れ、「ローズさんになるくらいなら、どんな人間にもならない方がましだわ。」(p.246)と考えたのである。

クロードは、アンジェールを郊外に連れ出し、これまで彼女の知らなかった生活を提供した。それによって、アンジェールは「仕事をしなくても過ごせる日がある」(p.190)ということを知り、次第に散歩やカフェでの時間を好むようになっていったのである。しかし、自分を外に連れ出してくれていたクロードという存在が消えてみると、結局自分は外に出られないのだという意識がアンジェールに重くのしかかってくる。一度外の世界を知ってしまった今、内における生活は以前と同じではなくなってしまった。これまで屋根裏部屋でミシンを踏み、スープを食べて寝るだけの生活に満足していたアンジェールは、これからもその繰り返しであろう自分の人生を前にして、「いわれの知れぬ疲れ、不思議な疲れ」を感じ、絶望する。そして、ローズさんのような人生を拒み、死を選んだのである。

クロキニョルの自殺

では次に、クロキニョルの場合を見てみよう。

2年ぶりに役所に現れたクロキニョルは、「夕方まで動きもしない」時の中でじっ

と我慢して身をひそめている同僚たちとは対照的な姿を見せる。

[...] il [= Croquignole] brillait, il luisait, il semblait que la vie l'eût frotté tout fraîchement. Il avait deux petites mains courtes, il sentait le vent, il sentait la terre, il sentait l'espace. Parfois, dans un mouvement plus large, il semblait agiter un monde inconnu et vous en apportait l'odeur. (p.258)

そして同僚たちに、自分の贅沢で気ままな暮らしぶりを披露する。それに対し、同僚たちは次のように言う。

— Tu parles à ton aise. Bien sûr, si nous avons des rentes... Mais que veux-tu, mon ami, il faut bien vivre. (p.260)

すると、クロキニョルは声高に言い返す。

— J'y ai beaucoup réfléchi. Et bien, ça n'est pas sûr ! (p.260)

そしてその翌朝、フェリシアンは次のように始まるクロキニョルからの手紙を受け取るのである。

J'ai prononcé cette après-midi un mot très bien et que vous n'avez pas assez remarqué. Vous étiez au bureau. Il y fait sombre. L'un de vous m'a dit : « Il faut bien vivre. » J'ai répondu : « Ça n'est pas sûr ! » Non, mon ami, ça n'est pas sûr. Et j'en fournis la preuve ! (pp.260-261)

そして、遺産を使い果たしたこと、マダム・フェルナンドに捨てられたこと、以前のように役所で働けるかもしれないと思ひ皆に会いに行ったが、15分も我慢できなかったことなどが綴られていく。しかし、それらが決定的な自殺の原因とは思われない。

ではなぜ、クロキニョルは自殺したのだろうか。

フィリップは、セバスチャン・ヴォワロルという評論家の批評に答えて、次のように述べている。

Mais ce qui, pour moi, a donné tant de valeur à votre article, c'est que

vous touchez à une des questions que je me pose encore aujourd'hui.

Dans mon esprit, Croquignole se tue parce qu'il ne peut plus retourner au bureau, parce qu'il a exagéré son amour d'une vie violente et sensuelle, parce qu'il lui faut l'air, l'espace, le feu, parce qu'il n'est pas capable de devenir le zèbre du jardin de Plantes. […] Sa force est ce qui le tue ou, plus clairement, sa force le tue.⁵⁾

ここで言われている「動物園の縞馬」« le zèbre du jardin de Plantes »とは、クロキニョルが自分の内に抱いているイメージである。それはアフリカから来た縞馬で、狭い動物園の一隅に閉じ込められている。しかし、じっとおとなしくしているほかの動物たちとは違い、縞馬は、その本性を捨てず、鉄格子を飛び越えていく機会をうかがっている。クロキニョルの遺書となった手紙にも、「動物園の縞馬も、動物園で生きていくのは辛いのだ」(p.263)という一文があるが、「動物園の縞馬」とは、すなわち役所にいるクロキニョルを指す。役所という動物園に閉じ込められていたクロキニョルは、「空気、空間、火」を求め、外へと逃げ出していった。しかし外には餌をくれる飼育員はいない。いまや遺産を使い果してしまったクロキニョルは、役所に戻って、働かなければ食べていくことができなくなってしまった。だが、果たしてそれが「生きる」ということなのだろうか。

彼を殺した「彼の力」とは、彼の情熱と言い換えてもいいだろう。彼の情熱は、「つまらぬ一生を時間に翻弄されながら」(p.48)じっと留まって生きることを彼に許さなかった。役所で生きるには有り余る情熱を抱いていたために、クロキニョルは外へと出て行った。そしてはや「毎日のパンを得る」(p.41)ための生活には戻れなくなってしまったのである。

結び

アンジェールもクロキニョルも、外を知ったばかりに、内へは戻れなくなってしまう。そして自分にのしかかってくる希望のない未来を拒んだ。アンジェールは、孤独のままミシンのかたわらで単調に過ぎていく日々を拒み、クロキニョルは、役所でじっと息を殺して生きていくことを拒んだのである。

しかし、その二人の自殺の描かれ方は大きく異なる。アンジェールの自殺が最後まで丹念に描かれ、涙を誘う描写となっているのに対し、クロキニョルの自殺には悲壮感がまるでない。「動物園の縞馬」が鉄格子を飛び越えるかのように、死という境界線を軽々と飛び越えていくクロキニョルは、自由と生命力にあふれた姿で、ふらりと旅に出るように死んでいくのである。

当初フィリップは、クロキニョルが自殺するまでの時間を刻々と追う詳細な描写を最終章に用意していた⁶⁾。しかし結局、手紙と翌日の新聞によって間接的に彼の死を伝えるというスタイルに変更したのである。これによって、本来悲しむべきものであり、恐ろしさを伴う自殺という行為から、現実味を失わせ、悲壮感を排除することに成功している。

ではなぜ、フィリップはクロキニョルだけをこうした表現で描いたのだろうか。

その答えを探るべく、フィリップの長編小説『ペルドリ爺さん』および短編小説「自殺未遂」における老人の自殺を見てみよう。どちらにも登場するロメ爺さんの最期は、次のように描かれている。

Un beau matin, il [= le père Lomet] en eut assez, sa femme ne pouvait pas travailler non plus et il ne voulait pas se faire nourrir par son gendre. Il y avait dans la ville un abreuvoir pour les chevaux. Il se leva à quatre heures et dit à sa femme : « Je ne peux pas dormir. Je vais sortir un peu. Au revoir ! » Il eut d' ailleurs beaucoup de peine à marcher jusqu'au trou d'eau. Blouf !... Cette fois-là il ne mit pas cinq ou six temps. C'était un homme fier.⁷⁾ (下線は筆者による)

老衰から働けなくなった老人の自殺が悲しくないはずはない。けれども、婿に養われて生きることを拒み、死を選択したロメ爺さんは「誇り高い男」« un homme fier » と評される。

このロメ爺さんのほか、セーヌ河に飛び込んだペルドリ爺さん、そして「自殺未遂」に描かれる首吊り自殺をしたラランド、ピストルで頭を打ち抜いたデュラントン、ロメ爺さんを手本とし水飼場に飛び込むも未遂に終わるラティエ爺さん⁸⁾。彼らの自殺は、失恋や破産、憂鬱や無気力といった理由によるものではない。「自分流の生き方」を曲げて生きることを潔しとせず、死を選び取るという自殺である。こうして「誇り高い男」たる爺さんたちは、自らの手でその人生に終止符を打つのだが、ここで彼らが皆「爺さん」つまり「男」であるということを強調しておきたい。自殺をするのはいずれも「爺さん」であって、「婆さん」たちは老衰で死ぬことになっている。「婆さん」たちは自殺をしないし、そうした彼女らに、「誇り高い」« fière » という形容詞がつけられることはないのだ。フィリップは、時評「ある自殺について」において、窓から飛び降り自殺をした若い娘に言及しているが、やはり彼女に対する眼差しは同情的で、その行為を完全に悲しむべきものと捉えてい

る⁹⁾。

このように、フィリップの小説世界には、「男の矜持」という価値観の優位性が指摘できるのだが、我々はここに、アンジェールとクロキニョルの死を決定的に隔てているものを見出すのである。

「つまらない一生を時間に翻弄されながら」生きるという人生を拒み、死を選び取ったクロキニョルの死に悲壮感がなく、読者の目に英雄的であるとすら映るのは、彼が「誇り高い男」として描かれているからである。そして、それはいわゆる悲哀に満ちたアンジェールの自殺とは全く性質を異にするものだ。

つまり、フィリップは、一般的な自殺という行為をアンジェールのケースに託し、これを悲しむべきもの、忌むべきものとした上で、「誇り高い自殺」という一つの可能性を示したのだと言えよう。

フィリップはこの作品において、「本当に生きなければならないのだろうか。」という問いを投げかけている。「*Il faut bien vivre.*」という前提に対する「*Ça n'est pas sûr!*」というクロキニョルの言葉はすなわち、人間はどんな人生でも生きなければならないのだろうか、という自殺をめぐる問いかけである。前述したフィリップの手紙に「今でも自問している」と書かれていたように、その答えは明確には出されていない。しかしながら、死ぬまで役所で働いたフィリップにとって、クロキニョルはやはり「誇り高い男」であり、一つの理想を実現した者であったと言えるのではないだろうか。

「自分流の生き方」を曲げて生き続けることを拒み、誇り高く死んでいく。こうした理想化された死のかたちを提示してみせることによって、フィリップは独自の自殺観を描き出したと考えられるのである。

注

Charles-Louis Philippe, *Croquignole*, Fasquelle, 1930からの引用は、直接本文中にページ数を示す。なお、邦訳は小林正訳（シャルル＝ルイ・フィリップ『クロキニョル』、『フィリップ全集 I』所収、白水社、1952）を参照させていただいた。

1) *Dictionnaire des Littératures* publié sous la direction de Philippe Van Tieghem, Presses Universitaires de France, 1968.

- 2) *La Nouvelle Revue Française*, XIV, 1910.
- 3) Emile Durkheim, *Le Suicide : étude de sociologie*, Presses Universitaires de France, 1960, pp.8-17参照。
- 4) David Roe, « Pages d'autrefois sur Croquignole » in *Bulletin des Amis de Charles-Louis Philippe*, n°52, 1996, p.38.
- 5) このほか、1896年に書かれたとされる未発表の短編小説 *Histoire d'un suicide*が、フィリップの死後、公表されている。(« Histoire d'un suicide (Texte inédit) » in *Bulletin des Amis de Charles-Louis Philippe*, n°26, 1968, pp.11-14.)
- 6) David Roe, « La Fin de Croquignole » in *Bulletin des Amis de Charles-Louis Philippe*, n°48, 1992, pp.1-24.
- 7) Charles-Louis Philippe, *La Père Perdrix*, Gallimard, 1983, p.181.
- 8) Charles-Louis Philippe, « Le Suicide manqué » dans *Dans la Petite Ville*, Plein Chant, 1997, pp.67-72.
- 9) Charles-Louis Philippe, « Sur un suicide » dans *Chroniques du canard sauvage*, Gallimard, 1951, pp.219-225.